

巻頭言

「研究テーマを決める」 ということ

公益社団法人日本油化学会名誉会員 池田 功



研究ということに関して産業界と大学には異なる役割がある。大学は研究者の価値観でそれぞれがテーマを設定し活動を行う場であってそれ故に多様な成果が生み出され、産業界に資するものが生まれる可能性がある。しかしながらこれは直接的あるいは短期的な実利を目的としないものであってあくまでも可能性である。

大学研究者は最初に研究生生活に入ったときの指導者の影響がいろいろな面で後々まで続く。その一つが研究テーマである。

はじめて与えられたテーマに対する興味が強いほどそのテーマに囚われてしまうのは自然の理であろうが、自分自身の価値観を持つべきであるということあるいは価値観は研究の進捗とともに変化するであろう故にテーマは何年かすれば変わっているべきだという考えもある。一方、指導者から与えられたテーマを一生続けて素晴らしい業績を残したという方もおられる。

振り返ってみると、研究活動のある程度経験してきて自分自身でテーマを決め得る立場に立った一時期研究テーマをどのように決めるかで大変悩んだ。エポックとなるような発展性のある見込めるテーマが望ましいことは当然であるが現実にはそのようなテーマに導いていけるような裏付けのある思考ができることはそうあるものではない。ある程度裏付けがあると判断できたとしても徒労に帰すかもしれないテーマに時間をかけて実践していく自信なり信念なりがない。一方、ある程度先が読めるものではそれほど発展性が望めない…。あれこれ考えているうちに結果を出さないといけないという気持ちからつまらないテーマを実行したという悔いが残っている。大きなテーマか否かは結果が出てから決まるものであって初めからそれを望んでできるものではないと言えるのであろう。

もともと化学の発展は大小様々な発見の積み重ねの結果によるものである。誰かが発見した現象を元にいろいろな立場の研究者がそれをさらに如何に発展させ新たな

発見に導いてきたか。これが現実であろう。実際、自分の関連する分野で「これは！」と思われる新しい報告があると誰しもがそれに飛びつく。早く飛びついたものがより早くスタートして有利に進捗させることができ、時には最初に発表したグループよりも先行し成果を挙げたという例もある。また、現象を発見した人よりも体系化した人の名前が Name Reaction として後世に残ることもある。

ここで大切なことはある現象に出会ったとしてもそれが大きな発見に至るか否かはよく言われる serendipity の問題である。論文を読む側にも報告された研究結果の持つ重要さを読み取りそれを自分の価値観に照らしてさらに発展させ得る能力が問われる。

誰しも可能な限り大きなテーマになるような意気込みで始めたいと思うものであるが、現実との折り合いが切実な問題となってくる。無駄となるかもしれない時間をかけてどこまで深く掘り下げることができるか。その勇氣なり心理的な余裕が持てるかどうか。このことがより価値のある大きな成果を得ることができるか否かに繋がると思える。

現在我が国の研究者たちの置かれている状況は我々の年代から見て大変気の毒に見える。短期間に成果が求められる結果、無駄も多いだろうけれどもいずれ発展性のあるテーマに繋がるという研究の発見は少なくなっているのではないかとさえ思える。外国でも同様のシステムで若手研究者のトレーニングがなされているように見えるが、少なくともアメリカなどではポスト・研究費の面などで若手研究者を受け入れる体制がより柔軟にできているのではないかと感じるころがある。

我が国の研究成果が外国に比べて低調になってきているということは私の現役時代すでに感じるころであったが、最近の報道を見るにつけそれがますます高じてくるのではないかと考えてならない。